

〔1〕 中学部の教育課程編成と指導の基本姿勢

「友だちといっしょに生活できる子」これが中学部のめざす子ども像である。小学部で自立化を中心に培われた力を、先生や友達、家族との関わりのある身近な社会生活の中で力いっぱい表現できることを意味している。

具体的には「日常生活に必要な基礎的な事柄を素直に表現しながら、仕事や運動に力いっぱい取り組む」という指導の重点をかがげ、集団参加能力の向上に代表される社会化に指導の中心を置き、本校が開発した段階別教育内容表のⅢ～Ⅳ段階の定着をめざしている。

この事は、職業化を中心にした高等部の生活への発展を見通したものである。

右上のⅠ図は、本校中学部生徒の段階別教育内容表Ⅳ段階への到達の様子を示した例である。個人差は大きく、自閉症、ダウン症、言語障害等、併せ持つ障害も多様化している。この実態に応じるため中学部では、山里主事に引き継がれたS59年より「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」を中心にした学級担任制をとり、その指導は具体操作、スモールステップ、反復練習、生活活用、集団参加、個別配慮を指導の原則として大切にしてきた。この事は、段階別教育内容表に示された内容を一つ一つ生きて働く力として身につけていける事であり、一人ひとりの社会的自立へ一歩一歩近づけていけると考えたからである。この考え方は今も一貫して変わっていない。



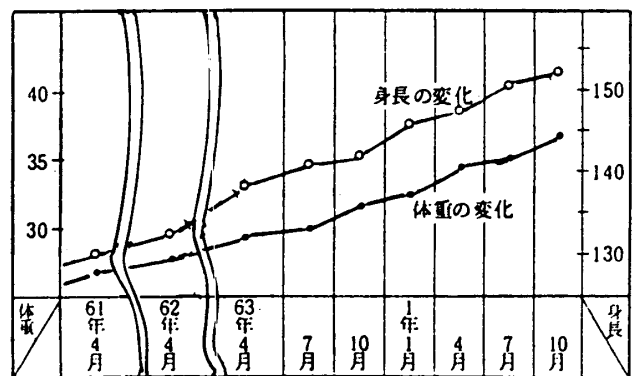
図1 段階別教育内容Ⅳ段階到達度(1989 5月と10月) —Ⅳ段階100%ライン

〔2〕 中学部の生徒にからだづくりが果たす役割

学習したことを生きて働く力として定着させていこうとした時、発達の違い、障害の偏りのいずれから、一次的、二次的障害として次の二点の弱さを感じる。

○表現しようとする安定した情緒や意欲、積極性、集中力、統制力等の気持ちや態度。

○日常生活に必要な知識や技能(表現技能)をしっかりと身につけられる身体機能や体力、意識。この弱さを「からだづくり」という観点から少しでも改善しようと共同で取り組んだのが、この「からだづくりを通して」の研究であり、我々は中学部の生徒のからだを次のように捉え、次のようなからだづくりを教育の中に位置づけようと考えた。



(1) 第二次性徴の発現と飛躍的にからだが育つ時期

前頁 2 図は、中学部 2 年、K 君の体格の変化を示した物である。多少のずれや遅れが見られるものの、この時期、障害のある子にも第二性徴がみられる。また、からだも飛躍的に育つ。

全力を出し切る機会を与え、育つエネルギーに応じた運動を課し、内蔵を含めた身体の諸機能をしっかり育てていく必要がある。丈夫でたくましいからだづくり開始の重要な時期である。

(2) からだを使うことを要求し、覚える時期

飛躍的にからだが育つ時期、からだは自然に運動を要求する。それを満たす場を教師や親は保障する必要がある。運動要求が満たされていないからだは、筋肉感覚の鈍化、大脳活動の低下、活動を嫌う子どもを育ててしまう。この事は、エネルギーを内攻させた不安定な精神状態や不快な心理状況を作るばかりではなく、肥満傾向を招き、運動嫌い、活動嫌いを作るといった悪循環を招く。

(3) 今迄出来なかった事が出来だし、自信ややる気が持てる時期

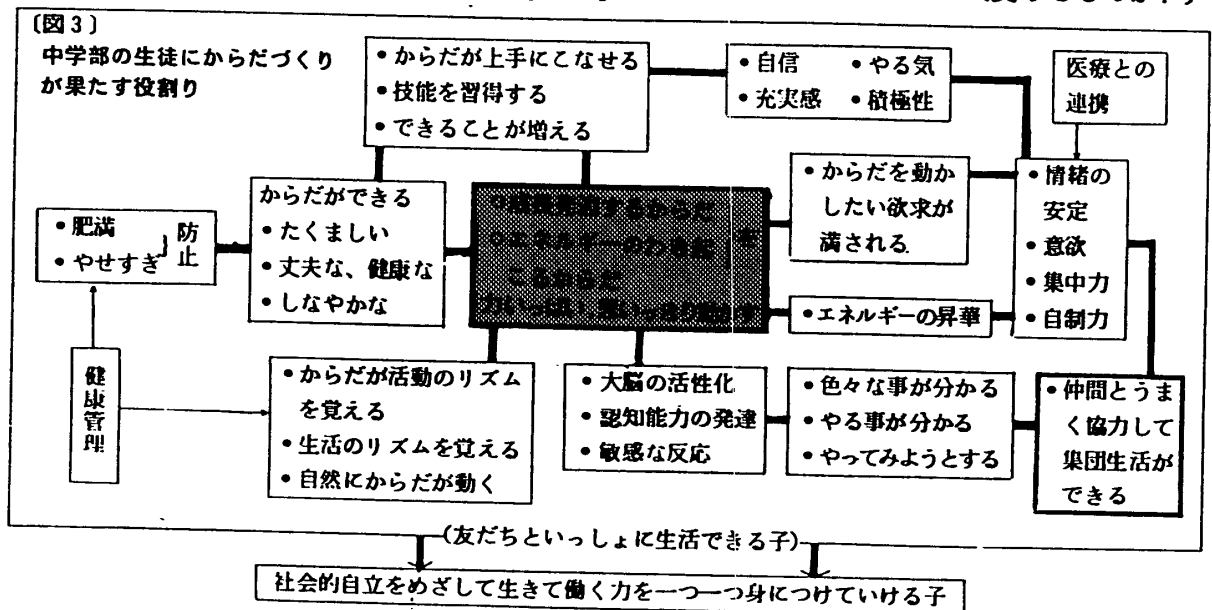
からだが大きくなり、大人顔負けの力がつき、年令効果も手伝って、今迄使えなかった大人の道具が使えだしたり、身のこなしが上手に出来だしたりする。そのことは、自分にも何かに役立つ活動が出来た事を自覚させ、喜ばせ、自信が持てだし、情緒が安定し、生活意欲の高まりへと結びついていく。



【負けるものか!】

(4) 困りの人の健康管理に少しは協力し、がんばろうとする力が育つ

以上の 4 点に集約されるからだの中学生に対し我々は、「楽しんで、力いっぱい、思いっきり、しっかりとからだを動かす」機会や場を保障していくことが大切であり、そのことによって、表現の基礎になる力の弱さを少しでも改善できるからだが出来、社会的自立をめざした力が少しずつだが効果的に獲得できると考えた。



(3) 63年度(一年次)の取り組みの概要

中学部の生徒のからだづくりへの取り組みは今に始まった事ではない。山里主事在任中の S 58 年